

# うつせみ

樋口一葉

青空文庫



家の間敷は三疊敷の玄關までを入れて五間、手狭なれど  
 も北南吹とほしの風入りよく、庭は廣々として植込の  
 木立も茂ければ、夏の住居にうつつけと見えて、場處も小石  
 川の植物園にちかく物靜なれば、少しの不便を疵にし  
 て他には申す旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大  
 凡三月ごしにもなりけれど、いまだに住人のさだまらで、主な  
 き門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき。家は何處までも奇  
 麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をとて

くるものも無なきにはあらねど、敷しき金こん三月分みつぎぶん、家賃やちんは三十さんじふにち  
 日かぎ限りの取とりたてにて七圓ななゑん五十錢ごじつせんといふに、それは下町したまちの  
 相場さうばとて折をりかへして來るはなかりき、さるほどに此このほどの朝あさまだ  
 四しじふ十ちかに近ちかかるべき年輩としごろの男をとこ、紡績織ぼうせきおりの浴衣ゆかたも少すこし色いろのさめ  
 たるを着きて、至極しごくそゝくさと落おちつき無なきが差配さはいのもとに來きたりて此  
 家のいへの見みたしといふ、案内あんないして其處そここゝ此處とだなと戸棚かずの數かずなどを見みせ  
 てあるくに、其等それらのことは片耳かたみみにも入いれで、唯たゞ四邊あたりの靜しづかとさは  
 やかなるを喜よろこび、今日けふより直すぐにお借かり申まをしまする、敷しき金こんは唯たゞ  
 今ま置おいて參まゐりまして、引越ひきこしは此夕暮このゆふぐれ、いかにも急きふ速そくでは  
 御座ござりませんが直様掃除すぐさまさうぢにかゝりたう御座ござりますとて、何なんの仔細しさい  
 なく約やく束そくはとゝのひぬ。お職しよく業げふはと問とへば、いえ別段べつだんこ

れといふ物も御座りませぬとて至極曖昧の答へなり、御人數は  
 と聞かれて、其何だか四五人の事も御座りますし、七八人に  
 もなりますし、始終ごたごたして埒は御座りませぬといふ、妙な  
 事のおもひしが掃除のすみで日暮れがたに引移り來りしは、合  
 ひのほろぐるますがた乗りの幌かけ車に姿をつゝみて、開きたる門を眞直に入りて玄  
 んくわん關におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひし  
 げなれど、乗り居たるは二十許の氣の利きし女中風と、  
 いまとり今一人は十八か、九には未だと思はるゝやうの病美人、顔に  
 てあしも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼  
 ろ白きがいたましく見えて、折柄世話やきに來て居たりし差配  
 が心に、此人を先刻のそゝくさ男が妻とも妹とも受とられぬと思

ひぬ。

荷物にもつといふは大八だいはちに唯一たひとくるま來りしばかり、兩隣りやうどなりにお

定めさだの土産みやげは配りくばけれども、家の内いへは引越うちらしき騷さわぎもなく至極しごく

寂ひっそり寞そりとせしものなり。人數にんずは彼のそそくさに此女中このぢよちゆうと、他ほか

には御飯ごはんたきらしき肥大女ふとつちよおよび、其夜そのよに入りてより車を飛とば

せて二人ふたりほど來りし人ひとあり、一人は六十ろくじふに近ちかかるべき人品じんぴんよ

き剃髮ていはつの老人らうじん、一人は妻つまなるべし對つゐするほどの年輩ねんばいにてこれ

は實法じつぽふに小ちひさき丸鬚まるまげをぞ結ゆひける、病やみたる人ひとは來るよりや

がて奥深おくふかに床とこを敷しかせて、括くり枕まくらに頭かしらを落おちつかせけるが、夜よも

すがら枕まくら近ちかくにありて悄しよんぼり然しとせし老人としより二人ふたりの面おもやう、何ど

處こやら寢顔ねがほに似にた處ところのあるやうなるは、此このむすめ娘めの若もしも父ちち母ははに

てはなきか、彼のそゝくさ男を始めとして女中ども一同旦  
 那樣御新造様と言へば、應々と返事して、男の名をば太吉太  
 吉と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すゞしきほどに今一人車に乗りつけゝる人のありけ  
 り、紬の單衣に白ちりめんの帶を巻きて、鼻の下に薄ら髯のある  
 二三十位のでつぷりと肥りて見だてよき人、小さき紙に川村  
 太吉と書て貼りたるを讀みて此處だくと車より下りける、姿  
 を見つけて、おゝ番町の旦那様とお三どんが眞先に襷を  
 はづせば、そゝくさは飛出していやお早いお出、よく早速おわ  
 かりになりましたな、昨日まで大塚にお置き申したので御座り  
 ますが何分もう、その何だか頻に嫌におなりなされて何處へか

行かう行かうと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸とまあ此處を  
ば見つけ出しまして御座ります、御覽下さりませ一寸斯うお  
庭も廣う御座りますし、四隣が遠うござりますので御氣分の爲に  
もよからうかと存じまする、はい昨夜はよくお眠になりましたが  
今朝ほど又少しその、一寸御様子が変わつたやうで、ま、いらし  
つて御覽下さりませと先に立て案内をすれば、心配らしく  
髯をひねりて、奥の座敷に通りぬ。

## 二

氣分すぐれてよき時は三歳兒のやうに父母の膝に眠るか、白



紙を切つて姉様のお製に餘念なく、物を問へばにこくと打笑  
 みて唯はいくと意味もなき返事をする温順しさも、狂風一  
 陣梢をうごかして來る氣の立つた折には、父様も母様も兄  
 様も誰れも後生、顔を見せて下さるな、とて物陰にひそん  
 で泣く、聲は腸を絞り出すやうにて私が悪う御座りました、堪  
 忍して堪忍してと繰返しく、さながら目の前の何やらに  
 向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行まする、今行まする、私  
 もお跡から参りまするとて日のうちには看護の隙をうかゞひて驅  
 け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物とは鍔  
 一つちやうめ  
 一 挺 目にかゝらぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業  
 かも、此纖弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて驅

け出す時いだしときには大だいの男二人をとこふたりが、りにててもむつかしき時ときのありける。

本宅ほんたくは二三番町さんばんちやうの何處どこやらにて表札へうさつを見ればみむ、彼のあ人ひと

の家うちかと合點がてんのゆくほどの身み分ぶん、今いまさら此處ここには言いはずもがな、

名前なまへの恥はづかしければ病院びやうあんへ入いれる事こともせで、醫者いしやも心こころ安やす

きを招まねき家は僕いへの太吉たきちといふが名なを借かりて心こころまかせの養やうじやう生ま、

一ひと月つきと同じ處おなところに住すまへば見みる物もの残こらず嫌いやになりて、次第しだいに病やまひ

の募つること見みる目めも恐おそろしきほど凄すさまじき事ことあり。

當主たうしゆは養子やうしにて此娘これこそは家いへにつきての一粒ひとつぶものなれば父ち

母ははが歎なげきおもひやるべし、病やまひにふしたるは櫻さくらさく春はるの頃ころより

と聞きくに、それより晝夜ちゆうまぶた瞼あはを合あする間まもなき心しん配ぱいに疲つかれて、老おい

たる人ひとはよろしくたよくと二人ふたりながら力ちからなさうの風情ふぜい、娘むすめが

やま病ひの俄にはかに起おこりて私わたしはもう歸かへりませぬとて驅かけ出いだすを見る折をりに  
 も、あれあれ何どうかして呉くれ、太吉たきち々々と呼よび立て  
 能のうなく情なさけなき躰ていなり。

昨夜ゆうべは夜よもすがら靜しづかねぶに眠ねぶりて、今朝けさは誰たれより一いちはな懸がけに目め  
 を覺さまし、顔かほを洗あらひ髪かみを撫なでつけて着物きものもみづから氣きに入りしを取と  
 出りし、友いづせん仙せんの帶おびに緋ひぢりめんの帶おびあげも人ひと手てを借かりずに手てば  
 しこく締しめたる姿すがた、不圖ふと見みたる目めには此この様やうの病びやう人にんとも思おもひ  
 寄よるまじき美うつくしさ、兩ふた親おやは見み返かへりて今いま更さらに涙なみだぐみぬ、附つきそ  
 ひの女をんなが粥かゆの膳ぜんを持もちきた來きたりて召めし上あがりますかと問とへば、いや／＼  
 と頭かぶりをふりて意氣いき地ぢもなく母はの膝ひざへ寄よりそひしが、今日けふは私わたしの年ねん季き  
 が明あきまするか、歸かへる事ことが出來できるで御座ござんしやうかとして問とひかける

に、年季ねんきが明あけるといつて何處どこへ歸かへる料簡れうけん、此處ここはお前まへさんの家うちではないか、此このほかに行くところも無なからうではないか、分わからぬ事ことを言いふものではありませぬと叱しかられて、それでも母様かあさま私わたしは何處どこへか行くので御座ござりましやう、あれ彼處あそこに迎むかひの車くるまが來きて居あまする、とて指ゆびさすを見みれば軒端のきばのちの木きに大おほいなる蛛くもの巢すのかゝりて、朝日あさひにかゞやきて金こん色じきの光ひかりある物ものなりける。

母はは情なさけなき思おもひの胸むねに迫せまり來きて、あれあんな事ことを、貴君あなたお聞きこばしりましたかと良人をに向むかひて忌いまはしげにいひける、娘むすめは俄にはかに遊そばしましたかと良人をに向むかひて忌いまはしげにいひける、娘むすめは俄にはかに萎しれかへりし面おもてに生いき々くとせし色いろを見みせて、あのそれ一昨をととし年としのお花見はなみの時ときねと言いひ出だす、何なにえと受うけて聞きけば學がく校かうの庭にはは奇麗きれいしたねえとて面おも白しろさうに笑わらふ、あの時とき貴君あなたが下くださつた花はなをね、

わたしいまほんあひだ  
 私は今も本の間へ入れてあります、綺麗な花でしたけれども、  
 う萎れて仕舞ました、貴君にはあれから以來御目にかゝらぬでは  
 御座んせぬか、何故逢ひに来て下さらないの、何故歸つて来て下  
 さらぬの、もうお目にかゝる事は一生出来ぬので御座んする  
 か、それは私が悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけ  
 れど、それは兄様が、兄が、あゝ誰れにも濟みませぬ、私が悪う  
 御座りました免して免してと胸を抱いて苦しうに身を悶ゆれば、  
 雪子や何も餘計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病  
 氣なのだから、學校も花もありはしない、兄様も此處にお  
 出でなさつては居ないのに、何か見えるやうに思ふのが病氣な  
 のだから氣を落つけて舊の雪子さんに成つてお呉れ、よ、よ、氣

が附つきましたかえと脊せを撫なでられて、母はの膝ひざの上うへにすゝり泣なきの聲こゑひくゝ聞きえぬ。

## 三二

番ばん町ちやうの旦那様だんなさまお出いでと聞きくより雪ゆきや兄にい様さんがお見舞みまひに來きて下くだされたと言いへど、顔かほを横よこにして振ふり向むかうともせぬ無禮ぶれいを、常つねならば怒いかりもすべき事ことなれど、あゝ、捨すてゝ置おいて下ください、氣きに逆さからつてもならぬからとて義母ははが手てづから與あたへられし皮蒲團かはぶとんを貰もらひて、枕まくらもとを少すこし遠とほざかり、吹ふく風かぜを背せにして柱はしらの際きはに默もく然ねんとして居みる父ちちに向むかひ、靜しづかひと、一ふたつ二ふたつ詞ことばを交まじへぬ。

番町ばんちやうの旦那だんなといふは口數くちかず少すくきなひと見みえて、時ときたま思おもひ出だ  
 したやうにはたくと團扇うちはづかひするか、卷煙草まきたばこの灰はひを拂はらつて  
 は又火またひをつけて手に持もつてゐる位くらゐなもの、絶たえず尻目しりめに雪子ゆきこの方かたを  
 眺ながめて困こまつたものすなと言いふばかり、あゝ此こん様な事ことと知しりまし  
 たら早はやくに方ほう法はふも有あつたのでしやうが今いまに成なつては駟馬しめも及およば  
 ずです、植村うゑむらも可か愛あい想さうな事ことでした、とて下したを向むいて歎たん息そくの  
こゑも聲こゑを洩もらすに、どうも何なんとも、私わしは悉しつ皆かい世せ上じやうの事ことに疎うとしな、  
は母はもあとほの通とほりの何なんであるので、三さん方ぼう四し方ほう埒らちも無ない事ことに成なつてな、  
 第だい一いちは此これ娘ねの氣きが狭せまいからではあるが、否いや植村うゑむらも氣きが狭せまいか  
 らで、どうも此こん様な事ことになつて仕舞しまつたで、私わし共ども二ふた人たりが實じつに其そ  
 方ちらあは合あは合あせる顔かほも無ないやうな仕儀しぎでな、然しかし雪ゆきをも可か愛あい想さうと思おもつ

て遣つて呉れ、此様な身に成つても其方への義理ばかり思つて情  
 ない事を言ひ出し居る、多少教育も授けてあるに狂氣すると  
 いふは如何にも恥かしい事で、此方から行くと家の恥辱にも  
 なる實に憎むべき奴ではあるが、情實を酌んでな、これほど  
 まで操といふものを取止めて置いただけ憐んで遣つて呉れ、愚鈍  
 ではあるが子供の時から是れといふ不出来しも無かつたを思ふと  
 何か残念のやうにもあつて、眞の親馬鹿といふのであらうが平  
 癒らぬほどなら死ねとまでも諦めがつきかねるもので、餘り昨  
 今忌はしい事を言はれると死期が近よつたかと取越し苦勞をや  
 つてな、大塚の家には何か迎ひに来るものが有るなど、騒ぎを  
 やるにつけて母が詰らぬ易者などにでも見て貰つたか、愚な話



しではあるがひとつき一月のうちにせいめい生命が危いとあやふか言つたさうな、聞き  
 いて見るとあまこゝろよ餘り快くもないにたうにん當人もしき頻りといや嫌がる様子なり、ま、  
ひきうつ引移りをするがよ宜からうとてこゝ此處をさが捜させてはき來たが、いや何  
ながもちうも永持はあるまいと思はれる、殆んど毎まいにちし日死ぬ死ぬと言いつ  
み見る通りとほ人間らしきいろつや色艶もなし、食しよくじ事も丁ちやうど度一週間ば  
いちりふくちかり一粒も口へ入れる事ことが無いに、そればかりでもからだ身軀の疲勞が  
はなはだ甚しからうと思はれるので種々いろくに異見いけんも言ふが、何どうも病やまひの故  
とかくであらうかとかく兎角に誰れの言いふ事ことも用もちひぬに困こまりはてる、醫者いしやは例  
やすだの安田やすだが來るので斯かう素人しろうとまかせでは我わがまゝばかり募つつて宜よく  
おもあるまいと思はれる、私わしの病びやう院いんへ入れる事ことは不承知ふしやうちかと毎ま  
いくき々聞きかれるのであるが、それも何どうあらうかと母はなどは頻しきりにい

やがるので私も二の足を踏んで居る、無論病院へ行けば自宅  
わしに あし ふ  
 と違つて窮屈ではあらうが、何分此頃飛出しが始まつて  
ちが きゆうくつ なにぶん このごろ とびだ はじ  
 私などは勿論太吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられ  
わし もちろん たきち くら ふたり ちから たうてい ひき  
はたらぬ働きをやるからの、萬一井戸へでも懸られてはと思つて、無  
ろふた論蓋はして有るが往來へ飛出されても難儀至極なり、夫等を思  
あ わうらい とびだ なんぎしごく それら おも  
 ふと入院させやうとも思ふが何かふびんらしくて心一つには定  
にふゐん おも なに こゝろと さだ  
 めかねるで、其方に思ひ寄もあらば言つて見て呉れとてくるく  
そり つむり な おも より い み く  
 と剃たる頭を撫で、思案に能はぬ風情、はあくくと聞居る人は詞  
な もろとも ためいき ふぜい きゝゐ りとことば  
 は無くて諸共に溜息なり。  
むすめ さきき なみだ み も  
 娘は先刻の涙に身を揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよ  
は ひざ よりそ ねぶ  
 くくと母の膝へ寄添ひしまゝ眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの  
くら くら よ つきそ

をなごとも ぐんない 女子と共に 郡内の蒲團の上へ抱き上げて臥さするにはや正しやうた  
 躰いも無く夢なに入ゆめるやうなり、兄あにといへるは静しづかに膝行いざりよりてさし  
 のぞくに、黒く多くろき髪おほの毛かみを最け惜いとしげもなく引ひきつめて、銀杏返いてうがへ  
 しのこはれたるやうに折返をりかへし折返をりかへし鬢形まげなりに疊たみこみたるが、  
 おほかたよこな 大方横なに成りて狼藉らうぜきの姿すがたなれども、幽靈いうれいのやうに細ほそく白しろき  
 て 手ふたを二かきつ重ねて枕まくらのもとに投なげ出し、浴衣ゆかたの胸少むねこしあらはに成なり  
 て、締しめたる緋ひぢりめんの帯おびあげの解とけて帯おびより落おちかゝるも艶なまめか  
 しからで慘いたましのさまなり。  
 まくらちか 枕まくらに近く 一いつ脚つきの机つくを据すゑたるは、折をりふし硯すざり々くと呼よび、  
 書物しよもつよむとて有ありし學がく校かうのまねびをなせば、心こころにまかせて紙かみい  
 たづらせよとなり、兄あにといへるは何なに心こころなく積つみ重かさねたる反古ほご

紙がみを手てに取りとて見みれば、怪あやしき書しよふう風ふうに正しやうたい躰たい得えしれぬ文字もじを  
 書かきちらして、これゆきこが雪ゆき子の手しゆせき跡なかと情なさけなきやうなる中なかに、鮮あざやか  
 に讀よまれたる村むらといふ字じ、郎らうといふ字じ、あゝ植うゑむら村録郎ろくらう、植うゑむ  
 村録郎ろくらう、よむに得え堪たへずして無むごん言ごんにさし置おきぬ。

## 四

今日けふは用ようなしの身みなればとて兄あには終しゆうじつ日こゝ此處こゝにありけり、氷こほり  
 を取とり寄よせて雪ゆきこ子の頭つむりひやを冷つきそひす附をなご添かほの女子かほに代かはりて、どれ少すこし私わしがや  
 つて見みやうと無ぶこつ骨こつらしく手てを出いだすに、恐おそれ入いります、お召めしもの物ものが濡ぬ  
 れますと言いふを、いゝさ先まづさせて見みてくれとて氷こほりぶくろ囊くちひらの口くちを開ひら

いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄  
 様が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心附けれども何  
 の事とも聞分ぬと覺しく、眼を見開きながら空を眺めて、あれ  
 奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様  
 兄様と聲を限りに呼べば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄  
 は此處だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見える  
 か、兄だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さ  
 んやお母さんを安心させて呉れ、こら少し聞分けて呉れ、よ、  
 お前が此様な病氣になつてから、お父様もお母様も一晩も  
 ゆるりとお眠になつた事はない、お疲れなされてお瘦せなされて  
 介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常

は道理だうりがよく解わかる人ひとではないか、氣きを靜しづめて考かんがへ直なほして呉くれ、植う  
 村むらの事ことは今いま更ま取さらかへされぬ事ことであるから、跡あとでも懇ねんごに吊ぶらつて  
 遣やれば、お前まへが手てづから香かう花げでも手たむ向ければ、彼あれは快こころよく瞑めいするこ  
 とが出來できると遺あし書しょにもあつたと言いふではないか、彼あれは潔いさぎよく此この世よ  
 を思おもひ切きつたので、お前まへの事ことも併あはせて思おもひ切きつたので決けつして未み練れん  
 は殘のこして居ゐなかつたに、お前まへが此このやうやうに本ほん心しんを取とり亂みだして御ご  
 兩うしん親なげに歎なげをかけると言いふは解わからぬではないか、彼あれに對たいしてお  
 前まへの處しよ置ちの無む情じやうであつたも彼あれは決けつして怨うらんでは居ゐなかつた、  
 彼あれは道理だうりを知しつて居ゐる男をとこであらう、な、左さ様さうであらう、校かう内ない  
 一いちの人ひとだとお前まへも常つねに褒ほめたではないか、其その人ひとであるから決けつし  
 てお前まへを恨うらんで死しぬ、其その様さまな事ことはあ**る**筈はずがない、憤いきどほりは世せ間けんに對たい

してなので、既にそれは人も知つて居る事なり遺書によつて明か  
 ではないか、考へ直して正氣になつて、其後の事はお前の心に  
 任せるから思ふまゝの世を経るが宜い、御兩親のある事を忘れ  
 ないで、御兩親がどれほどお歎きなされるかを考へて、氣を取  
 直して呉れ、え、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今  
 も直れるではないか、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居  
 處をたしかにしてな、直つて呉れ、よ、よ、こら雪、宜いか、  
 解つたかと言へば、唯點頭いて、はいはいと言ふ。  
 女子どもは何時しか枕元をはづして四邊には父と母と正雄  
 のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺えねども兄様  
 兄様と小さき聲に呼べば、何か用かと氷囊を片寄せて傍近

く寄るに、私を起して下され、何故か身躰が痛くてと言ふ、それは何時も氣の立つまゝに驅出して大の男に捉へられるを、振放すとして恐ろしき力を出せば定めて身も痛からう生疵も處々にあるを、それでも身躰の痛いが知れるほどならばと果敢なき事をも兩親の頼母もしがりぬ。

おまへの抱かれて居るは誰何、知れるかえと母親の問へば、言下に兄様で御座りましやうと言ふ、左様わかればもう仔細は無し、今話して下された事覚えてかと言へば、知つて居まする、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同顔を見合せて情なき思ひなり。

良しばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、



もう後生ごしやうお願ねがひで御座ござりまする、其事そのことは言いふて下くださりますな、  
 其そのやうに仰あふせ下くださりましたも私わたしにはお返事へんじの致いたしやうが御座ござりま  
 せぬと言いひ出いづるに、何なにをと母はが顔かほを出だせば、あ、植村うゑむらさん、  
 植村うゑむらさん、何處どこへお出遊いであそばすのと岸破がぼと起おきて、不意ふいに驚おどろく  
 まさをひぎつ、正雄まさをの膝ひざを突つきのけつ、縁えんの方かたへと驅かけ出いすに、それとて一いち同どう  
 ばらくと勝手かつてより太吉たきちおくらなど飛來とびくるほどにさのみも行ゆかず  
 縁えん先さきの柱はしらのもとにぴたりと坐ざして、堪かん忍にんして下くだされ、私わたしがわ  
 るう御座ござりました、始はじめから私わたしが悪わるう御座ござりました、貴君あなたに悪わるい  
 事ことは無ない、私わたしが、私わたしが、申まをさないが悪わるう御座ござりました、兄あにと言いふ  
 ては居をりまするけれど。むせび泣なきの聲こゑきこえ初そめて斷續だんぞくの言こ  
 葉とばその事こととも聞きわき難がたく、半なかかかげし軒のきばの簾すだれ、風かぜに音おとする夕ゆふぐ

れ淋<sup>さび</sup>し。

五

雪子<sup>ゆきこ</sup>が繰<sup>くり</sup>かへす言<sup>こと</sup>の葉<sup>は</sup>は昨日<sup>きのふ</sup>も今日<sup>けふ</sup>も一昨日<sup>をと、ひ</sup>も、三月<sup>みつぎ</sup>の以前<sup>いぜん</sup>も  
 其<sup>その</sup>前<sup>まへ</sup>もさらに異<sup>ことな</sup>る事<sup>こと</sup>をば言<sup>い</sup>はざりき、唇<sup>くちびる</sup>に絶<sup>た</sup>えぬは植<sup>うゑ</sup>村<sup>むら</sup>とい  
 ふ名<sup>な</sup>、ゆるし給<sup>たま</sup>へと言<sup>い</sup>ふ言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>、學<sup>がく</sup>校<sup>かう</sup>といひ、手紙<sup>てがみ</sup>といひ、我<sup>わが</sup>つ  
 罪<sup>み</sup>、おあとから行<sup>ゆき</sup>まする、戀<sup>こひ</sup>しき君<sup>きみ</sup>、さる詞<sup>ことば</sup>をば次第<sup>しだい</sup>なく並<sup>なら</sup>べ  
 て、身<sup>み</sup>は此處<sup>こゝろ</sup>に心<sup>こゝろ</sup>はもぬけの殻<sup>から</sup>になりたれば、人<sup>ひと</sup>の言<sup>い</sup>へるは聞<sup>き</sup>分<sup>わ</sup>  
 くるよしも無<sup>な</sup>く、樂<sup>たの</sup>しげに笑<sup>わら</sup>ふは無<sup>むしん</sup>心<sup>むかし</sup>の昔<sup>ゆめ</sup>を夢<sup>む</sup>みてなるべく、胸<sup>むね</sup>  
 を抱<sup>いだ</sup>きて苦悶<sup>くもん</sup>するは遣<sup>や</sup>る方<sup>かた</sup>なかりし當時<sup>たうじ</sup>のさまの再<sup>ふた</sup>び現<sup>うつ</sup>にあらは

るゝなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三  
 どのの末まで嬢さまに罪ありとはいさゝかも言はざりき、黄八  
 丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高髻にお根がけは  
 櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊  
 ばして學校がよひのお姿今も目に残りて、何時舊のやうに御平  
 癒遊ばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたもの  
 をとお倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、學問は  
 えらからうとも何うで此方のお嬢さまが對にはならぬ、根つから  
 私わたしは褒めませぬとお三の力めば、それはお前まへが知らぬから其様そのな  
 憎にくていな事ことも言へるものゝ三日交際みつかつきあひ際あひをしたら植村様のあと追お

ふて三途さんづの川かはまで行きたくならう、番町ばんちやうの若旦那わかだんなを悪いと  
 言いふではなけれど、彼方あなたとは質たちが違ちがふて言いふに言いはれぬ好よい方かた  
 あつた、私わたしでさへ植村うゑむら様が何なんだと聞きいた時ときにはお可愛かあい想さうな事こと  
 をと涙なみだがこぼれたもの、お嬢ぢやうさまの身みになつては辛つらからうではな  
 いか、私わたしやお前まへのやうなおつと來こいならば事ことは無ないけれど、不ふ斷だん  
 つゝしんでお出遊いであそばすだけ身みにしみる事ことも深ふかからう、あの親しんせ  
 切つな優やさしい方かたを斯かう言いふては悪わるいけれど若旦那わかだんなさへ無なかつた  
 らお嬢ぢやうさまも御病氣ごびやうきになるほどの心しんぱい配はいは遊あそばすまいに、左さう様  
 いへば植村うゑむら様が無なかつたら天下てんか泰平たいへいに治をさまつたものを、あゝ  
 浮世うきよはつらいものだね、何事なにごとも明あけすけに言いふて退のける事ことが出來でき  
 ぬからとて、お倉くらはつく／＼まゝならぬを痛いたみぬ。つとめある

身みなれば正雄まさをは日毎ひごとに訪ふ事こともならで、三日みつかおき、二日ふつかおきの夜よ  
くるまやなきなく、車くるまを柳やなぎのもとに乗りすてぬ、雪子ゆきこは喜よろこんで迎むかへる時ときあり、  
な泣ないて辭じす時ときあり、稚兒をさなごのやうになりて正雄まさをの膝ひざを枕まくらにして寐ね  
ときる時ときあり、誰たが給仕きふじにても箸はしをば取とらずと我わがま儘まをいへれど、正ま  
さをしか雄おなに叱おなられて同おなじ膳ぜんの上うへに粥かゆの湯ゆをすゝる事こともあり、癒なほつて呉くれ  
なほるか。癒なほりまする。今日けふなほ癒くつて呉くれ。今日けふなほ癒なほりまする、癒なほつて兄に  
いさん様はかまのお袴はかまを仕立したてて上あげまする、お召めしも縫ぬふて上あげまする、それ  
かたじけなやは辱なほし早なほく癒ぬつて縫ぬふて呉くれと言いへば、左様さうしましたらば植村うゑむら  
さま様よを呼よんで下くださるか、植村うゑむら様に遇あはして下くださるか、むゝ遇あは  
やして遣くる、呼よんでも來くる、はやく癒なほつて御兩親ごりやうしんに安あんしん心しんさせて  
く呉くれ、宜よいかと言いへば、あゝ明日あしたは癒なほりますると憚はゞかりもなく言いひ

けり。

まさしく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は  
 ひぐれも待たず車を飛ばせ來るに、容躰こと／＼く變りて何を  
 言へどもいや／＼とて人の顔をば見るを厭ひ、父母をも兄をも  
 女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知  
 りませぬとて打泣くばかり、家の中をば廣き野原と見て行く方な  
 き歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑氣つよくなりし八月の中旬より狂亂いたく募  
 りて人をも物をも見分ちがたく、泣く聲は晝夜に絶えず、眠ると  
 いふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相すさまじく此世の  
 人とも覺えずなりぬ、看護の人も勞れぬ、雪子の身も弱りぬ、き

のふも植村うゑむらに遇あひしと言いひ、今日けふも植村うゑむらに遇あひたりと言いふ、  
 川かはと一つ隔へだて、姿すがたを見みるばかり、霧きりの立たちおほふて朧おぼろげ氣げなれども明あ  
した日は明日あしたはと言いひて又またそのほかに物ものいはず。  
 いつぞは正しやうき氣きに復かへりて夢ゆめのさめたる如ごとく、父とく様さま母うつせみ様さまといをりふ折をり  
 のありもやすると覺おぼつか束つかなくも一日ひとひ二日ふたひと待またれぬ、空うつせみ蟬せみはか  
 らを見みつゝもなぐさめつ、あはれ門かどなる柳やなぎに秋あき風かぜのおと聞きこえ  
 ずもがな。





## 青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第一巻」新世社

1941（昭和16）年7月18日発行

1942（昭和17）年4月10日再版

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「讀賣新聞」

1895（明治28）年8月27～31日

※「太吉《たきち》太吉《たきち》」と「太吉々々《たきち》」

》」の混在は、底本通りです。

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。  
入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# うつせみ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>